

2022年度 入学試験問題

国語 B

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は□～四までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一九九〇年代後半に一般市民にインターネットが普及し始める以前のニュースの情報源は、極論すれば、どの国でも新聞とテレビのみであった。米国では主に都市部の知識層がニューヨークタイムズなどの大手紙を読み、地方都市の人々は地元紙を読んでいたので、全米をつないでいたのは三大テレビネットワークであった。今から思えば、それはテレビを通じて情報資源が米国民に均質に分配される「①情報平等社会」であったともいえる。

日本の場合、朝日新聞と産経新聞の論調は昔から大きく異なっていたが、時事ニュースを淡々と伝えるという点ほどの新聞社も同じであり、朝日の読者は注1田中角栄を知っているが、産経の読者は田中角栄を知らない、などということにはなかった。日本のマスメディアは「横並び」などとさんざん批判されていたが、テレビに加えて新聞が情報を国民に均質に分配している点では、米国以上の「情報平等社会」だったといえる。

人間にはもともと、「自分が知りたい情報」を優先的に信じ、「知りたくない情報」を注2忌避する心理的傾向がある。天気予報を例に考えてみよう。一週間後の日曜日の天気予報は雨だが、予報の的中精度はA、B、Cの三段階のうち、最も精度の低い「C」であったとする。予報は雨のままかもしれないし、晴れに変わるかもしれない。そういう時、一週間後に屋内で仕事することが確定している人は、予報の変化を事実として淡々と受け入れることができる。だが、同じ人であっても、一週間後にピクニックに出かけることが確定している場合には、「晴れに変わるかもしれない」と願い、晴れの注3兆候を必死に探そうとする。

② マスメディアは、情報に関する選択肢を人々に与えない代わりに、こうした「知りたい情報を優先的に信じる」という人間の心理的傾向に一

定の歯止めをかけていたと考えられる。マスメディアによって視聴を強制されていた「知りたくない情報」の中には、「知りたくはないが、知らなければならぬ情報」も含まれていたからである。

インターネットの普及以前のマスメディアは、味はおいしくないものの、これさえ食べていけば最低限の栄養バランスは保証される「③情報ランチ定食」のような存在だったと言えるかもしれない。情報源がマスメディアだけの時代には、人々が自分の責任において情報メニューを選ぶ機会は存在せず、人々に提供される情報の水準(情報ランチ定食の味)も高くはなかった。

しかし、逆に言えば、個々人の情報収集力、情報分析力、情報の出所を注4吟味する能力、複数の情報を比較する能力——などが問われる機会は少なく、注5荒唐無稽なニセ情報、注6陰謀論、極端な言説に個人がはまるリスクも、**1**と言えるだろう。

インターネットの普及は、こうした「人間と情報との関係」を一変させた。注7既存の紙の新聞とテレビに「知りたくない情報」を押し付けられていた人間は、インターネットにアクセスすることによって、おそらく人類史上初めて「自分が知りたい情報」だけを選択することが可能になった。さらに、「自分が知りたい情報」だけを知った人が「自分に同調する人が多いことを確認して安心するため」に集うことも容易になった。

米国の法学・政治学者であるキヤス・サンステイン氏は、インターネットの世界では無数の個人の意見が集約され、最終的には一つの大きな流れになっていく特徴があると指摘し、この特徴を「サイバー・カスケード」と呼んだ。カスケード(cascade)とは元々、階段のように小さな滝が連続している状態を意味する英単語である。サンステインは、人々が注8サイバー空間の一つの意見に同調していき、最終的には大きな

集団になることを、小さな滝が最終的には大きな水の流れになる現象に例えたのである（キヤス・サンステイン『インターネットは民主主義の敵か』石川幸憲訳、毎日新聞出版、二〇〇三年）。

人は誰でも、自分と同じ価値観の持ち主と交流すれば快適であり、反対に激しく反論されれば気分が悪いので、ネット空間では自分と似た価値観を持つSNSユーザーを選んで注9 フォローする。（中略）似た者同士が集う空間では、自分がSNSで意見を発信しても、自分と似た意見ばかりが返ってくる。このように同じ意見ばかりが返ってくる現象を、注10 閉鎖された小部屋で音が反響する物理現象に例えて「④ エコーチェンバー」という。

サンステイン氏は、ネット空間では付き合う相手を選ぶことができないため、インターネットには人間を一つのエコーチェンバー空間に閉じ込めてしまう特性があることを見抜いた。そして、エコーチェンバー空間の中でサイバー・カスケード現象が発生し、多数の人が同じ意見を支持していることを空間内の皆が実感し始めると、異論を差しはさむ人を徹底して排除し、その空間内の主張が極端に 2 化され過激になることを指摘したのである。

こうした環境下では、「自分が知らない情報や、知りたくない情報の中にも、知っておくべき情報があるだろう」と考えることができるかが最初の分かれ道になる。ここで「自分の知りたい情報」だけを選ぶ道に進めば、その人は特定のエコーチェンバー空間に閉じ込められ、異質な意見をすべて排除していくことになるだろう。

一方、「自分が知らない情報や、知りたくない情報の中にも、知っておくべき情報があるだろう」と考えて情報を集める人のところには、様々な情報が集まってくる。

だが、情報の注11 カオスともいえる状態の中から良質な情報を選び出していく作業は、しばしば困難である。昔は新聞社やテレビ局の編集者が料理した美味しくない「情報ランチ定食」を食べていけば済んだものが、今は自分の能力を頼りに情報の出所を吟味し、情報同士を比較し、ニセ情報をあぶり出さなければならぬ。

注12 本書の第一章で言及したインフォデミックが発生している今日、その知的注13 負荷に耐えられなくなる事態は誰にでも起こり得る、と私は考える。そして、その時に誰もが陥る可能性があるのが、何でも話を単純にしたがること——すなわち「これさえ知っていれば、社会全体や世界全体について説明できる」という陰謀論・史観に飛びつくことである。（中略）

こうした言説は、その強い断定調の物言いに特徴がある。陰謀論に基づく言説は、証拠を一つ一つ積み上げた末に導き出した結論ではないので、「これさえ信じていれば、世界全体について説明できる」ように 2 化され、さまざまな問題について自分の頭で深く考え抜かなくてもいいようにデザインされている。

陰謀論・史観は、最も⑤ 知的負荷の少ない世界についての解釈方法なので、インフォデミックの海の中で不安にさいまなれ、膨大な情報を吟味し続けることに疲れた人にとっては、心安らぐオアシスのように見えることがあるのかもしれない。

（一部内容を省略しました）

【白戸圭一『はじめてのニュース・リテラシー』】

注1 田中角栄……政治家。第六十四・五代内閣総理大臣。

注2 忌避……いやがって避けること。

注3 兆候……何かが起こると思わせる前ぶれ。きざし。

注 4 吟味：・物事の内容・事情をよく調べること。

注 5 荒唐無稽：・とりとめなく根拠きよがないこと。でたらめ。

注 6 陰謀論：・ある事件や出来事について、事実や一般に認められている説とは別に、ひそかにたくらまれた計画によるものであるとする考え方。

注 7 既存：・すでに存在すること。

注 8 サイバー空間：・コンピューターやネットワークによって作られた仮想的な空間。ここでは、インターネット空間。

注 9 フォローする：・ここでは、つながりを持つこと。

注 10 閉鎖：・とざすこと。とじること。

注 11 カオス：・物事の区別がはつきりしないさま。

注 12 本書の第一章で言及したインフォデミック：・本文より前の部分で、インフォデミックとは根拠のないうわさが世界規模で拡散する状態とされている。

注 13 負荷：・ここでは、負担。

問一——線①「情報平等社会」についての説明として最も適当なもの

のを、次のア～エから選びなさい。

ア 日本では、各新聞社の論調は異なっても時事ニュースの伝え方は「横並び」であり、テレビ以上に新聞が情報を均質に分配していた。

イ 米国では、インターネットの普及前にはテレビと新聞が情報源であり、それらはいずれも米国民に均質な情報資源を分配していた。

ウ 日本では、テレビに加えて新聞も「横並び」と批判されたが、淡々と時事ニュースを伝える点では米国以上に情報を均質に分配した。

エ 米国では、新聞は必ずしも全米をつなぐものではなかったが、テレビによって米国民に均質な情報資源が分配されていた。

問二——線②「マスメディア」とありますが、ここでの「マスメディア」が具体的に指すものを、本文中から五字程度でぬき出しなさい。

問三——線③「情報ランチ定食」とありますが、これは「マスメディア」のどのような特徴をたとえていますか。五十字以内で説明しなさい。

問四 [1]に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 全くなかった

イ 今よりは低かった

ウ 今と変わりなかった

エ 今よりは高かった

問五——線④「エコチェーンバー」とは、どのような現象ですか。本文中の言葉を用いて、次の文の [] に三十字以内で説明を補い、完成させなさい。

* ネット空間で、 [] という現象。

問六 二カ所ある 2 に共通して入る言葉を、本文中から二字でぬき出しなさい。

問七 ———線⑤「知的負荷の少ない」とありますが、これはどういうことを表していますか。「〜ということ。」につづくよう、本文中から三十文字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問八 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 筆者は、インターネット普及以前の社会と現代社会を比較し、それぞれの長所・短所を指摘したうえで、「情報平等社会」を再現すべきだという自らの立場を明らかにしている。

イ 筆者は、現代のネット社会の問題について考察するために自分の主張とは異なるサンスティーン氏の説も引用しながら、過激で偏った見方に陥らないための方法について持論を展開している。

ウ 筆者は、人間心理の分析もふまえながら、現代社会の人間と情報の関係の特徴について述べたうえで、ネット空間に閉じ込められた人間の視野が狭くなる危険性について指摘している。

エ 筆者は、メディアとの関わり方について以前の社会についても述べたうえで現代社会における問題点を浮き彫りにし、仮想世界でなくもつと現実世界に目を向けるべきだと主張している。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の俊介は、五歳の時から続けていたサッカーをやめて、日本最難関と言われる東駒中学を受験するために塾（Pアカ）に通い始めた。夏休みの夏期講習と勉強合宿を終えて迎えた二学期最初の日、俊介は学校からの帰宅後に家で寝過ごしてしまふ。遅刻して塾に向かう途中、街の人混みの中で俊介に声をかけたのは、塾の加持先生だった。加持先生は俊介を連れて喫茶店に入った。

「俊介、今日はどうした？」

弁当を食べ終えると、加持先生が聞いてきた。この店に来た時から遅刻の原因を聞かれることはわかっていたが、なにをどう話せばいいかわからず、俊介はしばらく口をつぐんだまま黙っていた。

「疲れたのか」

加持先生が口元に笑みを浮かべた。その笑顔に、頭の中で考えていたいくつもの言い訳が、ぱつとどこかに消えてしまふ。

① わかんない。注1 学校の先生にも、疲れて見えるって言われたけど、体力的にはまだいける。でも気力が注2 萎えている。

「俊介はサッカーやってたんだよな。何年間やってたんだ？」

運ばれてきたハンサムドを食べながら先生が質問を重ねてきた。一口が大きくて、もうすでに半分を食べ終えている。

「五歳の時に始めたから……七年間」

「ふむ、いいな。七年間もサッカーやってはのか」

口の中をいっぱいしながら喋るので、なにを言っているのかわからない。我慢できずに笑ってしまった。先生も笑い返ししながら、五分もか

けずにハンサムドを食べ切ってしまった。

「だからだな。おまえは本当に根性があるよ。どうだ俊介、東駒は遠いか？」

「……うん、遠い」

「あんな難しい学校、他にないな」

「うん……他にない」

東駒以外は受験するつもりはなく、落ちたら地元の公立中学校に行く。入塾の時に加持先生にはそう伝えたとお母さんが言っていた。東駒しか受けないなんて、現実をなにもわかっていない入塾前だから言えたことだ。サッカーを始めた五歳の時に「日本代表に入る」と豪語していたのと同じ。でも加持先生から志望校についてなにか言われたことは、一度もなかった。

「なんで東駒なんだ？」

「……将来ロボットを作りたいからです」

「それだけが目的なら、他にもいろいろ学校があるだろ。中高一貫の優秀な国公立の中学が、都内にはたくさんある。東駒にそこまでこだわ理由はなんなんだ？」

そこまでこだわる理由、と言われ、② 俊介は下を向いた。自分の手をじつと見つめ、右手の中指に貼ってある絆創膏に触れる。「ペンダコが痛そうだから」とお母さんが昨日の夜に巻いてくれた絆創膏……。右手の親指でペンダコをなぞりながら、俊介は再び黙る。

でもいまのこの気持ちを誰かに話さないと、心が破裂しそうだった。俊介はゆっくりと顔を上げ、口元にきゅつと力を入れる。

「生き方を変えたいからです」

長い沈黙の後、俊介がようやくそう答えると、③ 加持先生は両目を大

きく見開いた。口をすぼませ、ふいのパンチを食らったような表情で俊介を見返してくる。

「なんだ俊介、おまえ、えらく大人びたことを言うな」

「ほんとのことですよ」

加持先生がコーヒーのおかわりを頼むと、一緒にプラスチックのコップに入ったオレンジジュースが運ばれてきた。おばあさんが「あたしからのサーブだよ」と俊介の前に置いてくれる。

「おまえは、いまの自分が嫌なのか？」

困ったような顔をして加持先生が聞いてくる。加持先生がこんな顔をするのは珍しい。

「はい、おれは……④自分が嫌いです」

加持先生が真剣に聞いてきたので、自分も真剣に答えた。誤魔化すことも流すこともできたけれど、それはしなかった。

「そうか……。理由を聞いてもいいか」

しばらく考えた後、俊介は頷いた。急に足が震えてきたので、両手で両膝を強くつかんだまま、加持先生の顔を見る。

「おれ、妹がいるんです。いま一年生で、同じ小学校に通ってるんですけど、生まれつき耳が聴こえないんです。先生は……先天性風疹症候群って知ってますか？」

コップに浮かぶ氷がぶつかり、カラシという小さな音を立てた。オレンジジュースは美音も大好きだ。ファミレスのドリンクバーでも、オレンジジュースばかり飲んでる。

「いや、知らないな」

「赤ちゃんの病気です。妊婦さんが風疹に罹ったら、そういう病気の赤ちゃんが生まれてくることであって……。心疾患とか白内障とか……難

聴とかが、代表的な症状で……」

俊介の体に赤い発疹が出ているのに気づいたのは、幼稚園の担任の先生だった。

——俊ちゃん、ここ痒くない？ ほら、小さな赤い点々があるでしょう。

(中略)

「おれが四歳の時に風疹に罹って、それをお母さんに……」

うつしたんです、と言おうとして喉が詰まった。それ以上言葉が続かず、そのうちに声を出す力がなくなった。

「俊介が風疹に罹って、それを妊婦だったお母さんにうつした。そういうことか？ その話は誰から聞いたんだ、お父さんかお母さんがおまえに話したのか？」

俊介は俯いたまま、大きく首を横に振る。お父さんとお母さんが話したわけじゃない。

「おまえがこのことを、妹さんの耳が聴こえない原因を知ってるってことを、ご両親はご存知なのか？」

俊介はもう一度首を左右に振る。お父さんとお母さんはいまも、俊介がなにも知らないと思っている。だから自分もなにも知らないふりを続けている。話す勇氣もない。

偶然、聞いてしまったのだ。

四年前の夏の日、家族で征ちゃんのおじいちゃん牧場に遊びに行った時に大人たちが話しているのを、耳にしまった。

——わかったわ。征にも厳しく言い聞かせとく。でも……美音ちゃん難聴の原因が、幼稚園で流行った風疹だったってこと、誰が広めたのかしらね。幼稚園で風疹が流行ることなんてよくあることなのに……。

誰も悪くないのに、本当に酷い噂話をする人がいるわね。

プール遊びをしていて、全身から水滴を滴らせ、俊介は居間の縁側に上半身を乗り出していた。お母さん、水鉄砲取って。そう叫ぼうとしたら、征ちゃんのお母さんの言葉が、聞こえてきた。言っていることの意味はよくわからなかったのに、自分にとってとても怖ろしい話だということにはわかった。「誰も悪くないのに」の「誰も」は、自分のことなのだと、なぜか直感で気づいた。「俊ちゃんは悪くないのに」と、おぼさんは言いたかったのだ。

テーブルの隅に視線を落としたまま黙りこくっていると、
「おまえが入塾テストを受けた時、担当していたのはおれだったんだ。憶えてるか？」
と加持先生が聞いてきた。下を向いたまま、俊介は頷く。

「入塾テストの結果を、おれからおまえのお母さんに説明したんだ。何点だったかな？ 点数ははつきりと憶えてないけど、あんまり良くはなかったな。それでお母さんもえらく恐縮してて、これじゃあ入塾は無理ですね、って帰ろうとしてたんだ」

その話はお母さんから聞いた気がする。でも帰ろうとしたことは、知らなかった。

「おれはおまえを合格にした。合格点には達してなかったけど、そんなことは正直なところさほど関係ない。成績が伸びるかどうかは、その時点の学力よりもむしろ、子どもの性質を重要視するところがあるんだ。それでおれは、おまえなら絶対に伸びると思った。こういう仕事をしていると、時々巡り合うんだ。黙っているのに顔から、全身から、負けん気が立ちのぼっているような子に出逢う。おまえはそんなやつだった。そういう子どもには必ず、金の角が生えてくる。だからおれはおまえに、

勉強を教えてみたいと思った」

知らない間に頬を伝っていた涙を手の甲で拭いてから、俊介はゆっくりと顔を上げる。

「先生はいつも……金の角って言うよね」

加持先生が⑤そんなふうに見てくれていたなんて、全然知らなかった。人より遅れて塾に入った自分には、角も生えないだろうと諦めていたのだ。

「おれが合格だと伝えたら、お母さんすごく驚いてな。涙浮かべて、おまえのことを頑張り屋なんだって言ってたよ」

涙ぐむお母さんの顔が、俊介の頭の中にすぐに浮かぶ。お母さんは、俊介や美音が褒められるとすごく喜ぶ。自分が褒められているような、とても嬉しそうな顔をする。

「お母さんの言葉は嘘じゃなかったよ。四月に入塾してからこの半年間、おまえは本当によく頑張ってる。おまえの急成長は、Pアカ新宿校の講師陣の間でも話題になってるくらいだ。でも今日、おまえがどうしてこんなに頑張れるのかがわかったよ」

先生はいったん口をつぐみ、静かに息を吐き出した。
「俊介おまえ、しんどい人生だな」

先生の言葉を聞いたとたん、涙がまた溢れてきた。抑えようとして、でもどうやっても泣き声が漏れ出してしまふ。先生の言ったとおりだった。これまでずっとしんどかった。でもしんどいなんてことを口にしたらいけないと思っていた。自分が弱音を口にするなんて許されないと、怯えていた。先天性風疹症候群という病気を初めて知った時。幼稚園での記憶が、その病気と結びついた時。そこからほんとに……しんどくてたまらなかつた。だから頑張るしかなかったのだ。必死に頑張って、美音を守

れる強い兄ちゃんになって、それだけが自分のできる精一杯だと思って生きてきた。でもサッカーがだめになって、もうどうすればこれ以上頑張れるのかわからなくなった時に、東駒のことを注5倫太郎から聞いた。日本で一番難しい中学校に挑んで、もし合格したなら、自分を許せるかもしれないと思ったのだ。

「なあ俊介、その年でそんな大きなものを背負うなよ。……おまえの気持ちがおれにはわかるよ。先生にも守らなきゃならない家族がいる。でもおまえはその年で、そんな大きなものを背負う必要はない」

先生の手がテーブルの向こう側から伸びてきて、俊介の頭をそつとつかむ。

「俊介は賢い。努力もできる。ただ東駒は最難関だ。あと半年でおまえの学力が東駒レベルまで上がるかどうか、正直なところおれにもわからない。でもこの受験がおまえを少しでも楽にしてくれるなら、おれも全力で教える。応援するんじゃないと一緒に挑戦する」

俊介はテーブルの上に置いてあったおしぼりを手に取って、両目に強く押し当てた。それからおしぼりで頬を拭い、鼻水を拭い、口元を拭いてから前を向いた。目を開くと、いままで涙で歪んでいた先生の顔がはっきり見えた。

「⑥ 先生は……中学受験をすることに意味があると思いますか？」

みんなに、ここまで過酷な受験勉強をさせることに納得できないの。だって六年生の夏休みは、人生で一度きりしかないんだから。

中学受験なんてなんの意味もないって言ってたぞ。

金と時間を使って塾に通っても、合格しなかったらどうせ広綾中に行くんだ。

勉強を頑張りたいなら、中学に入ってからでも遅くないって。

頭の中にこびりついて離れなくなっていた豊田先生や注6智也のお父さんの言葉を、俊介はもう一度口の中で唱えてみた。俊介の胸を刺す、小さな棘がびっしりと付着した言葉。

「もちろんだ。じゃないと、中学受験の塾講師なんてやらないだろう？ おれは、中学受験には意味があると思ってる。⑦ 人は挑むことで自分を変えることができるんだ。十二歳でそんな気持ちになれる中学受験に、意味がないわけがない」

先生はそう言って微笑むと、そろそろ塾に戻るぞと立ち上がった。

(一部内容を省略しました)

【藤岡陽子『金の角持つ子どもたち』】

注1 学校の先生：俊介の小学校の担任の豊田先生。この日、学校で元気がない様子の俊介を心配して「受験勉強に疲れてない？」と声をかけていた。

注2 萎えている：弱っている。

注3 美音：俊介の妹。

注4 征ちゃん：俊介の幼稚園からの幼なじみの友人。

注5 倫太郎：俊介の友人。俊介と同時期にサッカークラブをやめて

Pアカに通い始めた。

注6 智也：俊介の幼稚園からの幼なじみの友人。

問一 —— 線① 「わかんない」とありますが、この時の俊介についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 先生から突然予想もしていなかった質問をされてとまどっている。
イ 自分の今の状態を、先生にうまく伝える言葉が見つからずにいる。
ウ 言い訳を考えていたことを見透かされて、恥ずかしく思っている。

エ 遅刻の理由を先生に悟られないように警戒して言葉を選んでい
問二 —— 線② 「俊介は下を向いた」とありますが、この時の俊介に

ついでの説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。
ア 東駒に合格することは難しいことを先生から遠回しに言われて落ち込んでいます。

イ 現実を知らずに東駒以外は受験しないという選択をしたことを後悔している。

ウ 自分が東駒を目指す本当の理由をここで先生に話すべきかどうか迷っている。

エ 改めて理由を聞かれて、自分がなぜ東駒に行きたいのかが分からなくなっている。

問三 —— 線③ 「加持先生は両目を大きく見開いた」とありますが、この時の加持先生の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 小学生の俊介が大人のような言葉遣いをしたことに対して戸惑う気持ち。

イ 期待していた答えとは異なる答えが返ってきたことですがっかりする気持ち。

ウ 小学生ながら自分の生き方について真剣に考えていることに感心する気持ち。

エ 俊介の口から思いもよらない答えが返ってきたことに対して驚く気持ち。

問四 —— 線④ 「自分が嫌いです」とありますが、俊介はなぜ「自分が嫌い」のですか。その理由を、二十五字以内で説明しなさい。

問五 —— 線⑤ 「そんなふうに見てくれていた」とありますが、加持先生は俊介をどのような子どもだと思っ
文の ・ に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ五字程度でぬき出しなさい。

*入塾時の学力は高くなかったが、 が強く、今後 が期待できる子ども。

問六——線⑥「先生は……中学受験をすることに意味があると思いますか？」とありますが、俊介はなぜこのように聞いたのですか。

最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア もし東駒に合格できる可能性が低いのであれば、志望校を変えた方が良いでしょう。

イ 中学受験をすることの意味について、立場の異なる色々な大人の意見を聞いて参考にしたいと思ったから。

ウ 加持先生から、そんな大きなものを背負う必要はないと言われ、中学受験をする意味が分からなくなったから。

エ 自分のことを理解してくれている加持先生が中学受験をどのようにとらえているかを知りたくなったから。

問七——線⑦「人は挑むことで自分を変えることができるんだ」とありますが、俊介の場合、どのように自分を変えようとしているのですか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問八 本文における表現の説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 俊介の心情の描写を中心としつつ、他の人物の心の動きも発言やしぐさによって表現されている。

イ 俊介が過去に人から言われた言葉を思い出す描写を入れることで心情表現に奥行きを与えている。

ウ 会話文に「……」を用いることで、登場人物が内心では相手に心を開いていないことを示している。

エ 俊介の母親は直接場面に登場しないが、俊介と母親が互いに相手

を思いやる気持ちは読み取れる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二〇二一年にユネスコによって奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島が世界自然遺産に登録されました。世界自然遺産では「自然を人類共通の財産として保護し、後世に伝えていくこと」を掲げていて、私たちはこれらの地域で生息している絶滅危惧種や固有種を保護していく役割が求められています。

また、私たちはこれらの地域で話されているそれぞれの言語についても ^a ちょうウサや研究を行い、保存することも求められています。なぜなら、二〇〇九年にユネスコが発表したデータによると、現在世界で使われている七〇〇〇もの言語のうち、およそ二五〇〇もの言語が消滅の危機にあると指摘されていて、日本ではアイヌ語をはじめ、与那国語や奄美語、宮古語といった八言語がその対象であるといわれているからです。

異なる言語を使用する人と ^A をはかるためには、世界共通の言語を持つことが必要となります。その一方でそれぞれの言語が消滅するようないことがあってはなりません。その理由を探ってみましょう。

たとえば奄美群島には、奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島の五つの島があります。これらの島は、琉球王国や薩摩藩の支配下にあつたこともあって、^b ドクトク^{ドクトク}の言語が存在している地域ですが、奄美大島の言葉には奄美大島の島民でなければ分からない言葉も多くあります。奄美大島以外にもそれぞれの言葉を使って生活を営み、文化を継承して、^B につなげていこうとしている人たちが世界の様々な地域で暮らしているのです。

経験というものは、国や地域によっても異なってくるものであり、そこには自然環境だけではなく、社会制度、文化なども大きく影響しています。様々な背景の中で人々によって作られた言語には、その国や地域

の影響が少なからずあり、固有の言語でしか伝えられないものもあるのです。なぜこのように多くの言語が消滅の危機にさらされているのか、今、どのようなことができるのか考える必要があるでしょう。

問一 〰〰〰線 a 「チョウウサ」・ b 「ドクトク」を漢字に直しなさい。

問二 A に当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア 意気投合 イ 創意工夫 ウ 意思伝達 エ 意思表示

問三 〰〰〰線 「その理由を探ってみましょう」とありますが、これらの言語を消滅させてはいけない理由が書かれている一文を本文中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。(句読点なども一字にふくみます)

問四 B に当てはまる二字の言葉を、本文中からぬき出しなさい。

問五 本文の内容として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 絶滅危惧種や固有種を保護するためには、その土地の言葉を守り、継承することが必要である。

イ 支配された国の言語は、支配される前の国の言語にもと戻もどることはなく、消滅してしまう。

ウ 様々な国の言葉の由来を理解しなければ、言葉の多様性は失われていってしまう。

エ 国によって言語の生み出され方は様々で、それらの言語を守っていくことが多様な文化の共存につながる。

問六 〰〰〰線 「なぜこのように多くの言語が消滅の危機にさらされているのか、今、どのようなことができるのか」とありますが、多くの言語が消滅しそうになっている理由と、それを防ぐためにできることを説明しなさい。

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の1～5について、下の()の意味になる敬語をそれぞれ答えなさい。(□には、ひらがな一字が入ります)

- 1 先生は何を□□□□□ますか。(食べる)
- 2 ゆっくりと□□□□□て下さい。(見る)
- 3 私がそちらまで□□□ます。(行く)
- 4 すてきなお着物を□□□ですね。(着る)
- 5 目上の人に□□□□□。(言う)

問二 次の1～5の熟語と同様の意味または反対の意味のものを後の語群からそれぞれ選び、漢字に直しなさい。(語群の中で同じものは二度使用しないこと)

- 1 例外 2 用意 3 不和 4 冷静 5 消息

〈語群〉

じゅんび	げんそく	はいぼく	こうふん	ぜつぼう
しゅうごう	しんせつ	えんまん	ちようしよ	おんしん